

シリーズ
古典再生

3

歴史のなかの 源氏物語

山中裕
編



思文閣出版

はしがき

本書の意図は歴史の視点から『源氏物語』を考えてみようというところにある。『源氏物語』と歴史との関係については、すでに国文学の方々によつて多くの研究成果があげられているので、今さら新たに考慮しても、たいしたことはのぞめないかもしれない。しかし、一方、『源氏物語』を歴史的に見ようとする方法論はいまだ存在していないとも思われる。それは歴史家とくに『源氏物語』を専門的に追究する人が少なかつたためでもあろう。

このままだが新鮮な視点による研究を、どのようにかたちにして行くか、常時、『御堂関白記』の研究会などで一緒に勉強している研究者たちと相談した。そこで、まず紫式部という人物、そして、摂関政治のなかでも最もよき藤原道長の時代が、どのような社会で、どのような文化の華が開いた時であるのか、また女房文学や女房日記の本質は何かということなどを念頭に置きながら、『源氏物語』とその周辺を幅広くとらえて書こうという見方で一致し、歴史と国文学の研究者とに、大まかなテーマの配分のもとで割合自由に執筆していただいた。結果として、『源氏物語』のなかに道長時代の世相がどのように反映し、また『源氏物語』

が前後の時代とどのようにかかわり、さらに、この物語がどのように理解され受け継がれていったのか、そうした課題に重点を置いて本書がまとめられることになった。全体を、(1)歴史のなかの『源氏物語』、(2)准拠と古注釈、(3)風俗と通過儀礼、(4)『源氏物語』をとりまく文学の四部に分けて構成した。

私の執筆した(1)は全体を見通すように、紫式部と『源氏物語』の完成した時代をとらえ、賜姓源氏の人々に注目しながら、摂関時代の文化の有り方、道長の存在と紫式部との関係に重点を置いて論じた。(2)には、歴史的考察に欠かせない准拠論およびそれを導いた古注釈に関する各氏の論考をまとめた。(3)には、節会や通過儀礼、装束など当時の皇族・貴族・歌人等々の風俗・有職故事に関する論考を配した。(4)には、作者紫式部、『源氏物語』にかかわりの深い和歌・漢詩文、さらに「歴史物語」に関する論考を置いた。

こうして本書は多彩な内容構成となった。各執筆者の努力によって期待していたものが蒐集できたことは、まことに嬉しい。今後さらに、歴史を重視する論考が数多く発表されることを期待したい。歴史学者のなかからも『源氏物語』を中心としての研究が、さらにひろがって行くであろうことを希望し、なお一層の発展を祈るところである。

二〇一一年一〇月

山中裕

目

次

はしがき 山中 裕

第一部 歴史のなかの『源氏物語』

『源氏物語』誕生の歴史的背景 山中 裕 3

第一部 准拠と古注釈

『源氏物語』における准拠とその意味 藤本勝義 39

「准拠」の来歴について 佐藤信一 62

秋好中宮の童女 松野 彩 76

『源氏物語』の古注釈と歴史 松岡智之 87

延喜・天曆の治 木村由美子 104

失われた空間の物語

——『河海抄』の延喜・天曆准拠説——……………塚原明弘……………118

靱負尉と簾中の人影——松風巻試解——……………吉田幹生……………134

第三部 風俗と通過儀礼

節会と宴——紫式部の描く王権——……………大津透……………153

「おほぎみ姿」について……………近藤好和……………174

通過儀礼に対する平安貴族の認識

——産養をめぐる——……………武井紀子……………195

光源氏の元服と穀倉院……………磐下徹……………211

「碁聖が碁にはまさらせたまふ」浮舟考……………川村佐和……………230

第四部 『源氏物語』をとりまく文学

『紫式部日記』の紫式部……………	池田尚隆……………	249
『源氏物語』の和歌批評と漢詩文引用……………	飯沼清子……………	265
歴史物語はなぜ書かれたか……………	中村康夫……………	283

執筆者一覧

第一部
歴史のなかの『源氏物語』

『源氏物語』誕生の歴史的背景

山中 裕

『源氏物語』の作者紫式部

『源氏物語』と歴史、これは大きな問題である。

『源氏物語』誕生の歴史的背景として、この物語が書かれたころの時代の実態、いわば道長時代の社会の真相を大きくとらえることが必要であるが、まずは、作者紫式部のことから始めていこう。

紫式部の父は藤原為時ためときである。母とは式部が生まれてまもなく死別したらしい。従って式部の生涯は為時と関係が深い。式部の生涯を明らかにする文献史料の主なもの、『紫式部日記』と『紫式部集』である。しかし、日記は存するといえども、公卿の日記・古記録など

とはちがつて寛弘五、七年（一〇〇八、一〇一〇）のわずか二年半しかなく、歌集といえども和泉式部や赤染衛門あかぞめのえもんのように歌数が多くない。幼いころのことはほとんど分からず、親しき友達と会つて、まもなく別れたときの、

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半よはの月かな

の有名な和歌が残されているぐらいで、やはり明らかになつてくるのは成人後である。即ち為時が越前守となり、国府のある武生たけふ（現在の福井県越前市府中）へ赴任したところから明瞭になる。

為時はこのとき、淡路守に任せられかけていたのを越前に憧れて、淡路の不满なることを書に託して天皇に申し上げた。一条天皇は為時の漢詩文に心動かされ、道長が天皇の意を汲んで、為時の越前守就任を実現したという（『続本朝往生伝』）。ここにも道長の力がおよんでいたのである。『日本紀略』長徳二年（九九六）正月二八日条に、

（道長）右大臣参内、俄停越前守国盛、以淡路守為時任之。

とある。伝説めいたところも多少残るが、言われているところではよからう。

式部は父親とともに武生に行つた。このときの年齢は明確には分からないが、二〇代後半ぐらいであつたらうか（式部の生年・没年については文献がないため推定説が多い）。

為時の越前への旅立ちは、長徳二年夏ごろといわれている。『紫式部集』に大変に詳しくあり、三尾が崎とか磯の浜など琵琶湖周辺の地名が多く出てくる。琵琶湖北岸の塩津山から敦賀へと向かい、さらに内陸側の武生へと進んだのであろう。そして初冬のころ武生へ入ったらしい。「年かへりて」と歌集の詞書にあるところから、長徳三年の正月は武生で迎えている。

しかし、まもなくまたいここにあたる藤原宣孝のぶたかとの愛が進み、長徳三年か四年に二人は結婚するにいたっている。おそらく長徳四年の春であらう。式部は単身で帰京する。「かへる山越えけるに」「みづうみにて、伊吹の山の雪いと白く見ゆるを」と詞書に見え、琵琶湖畔を東岸に出て船で南下し、伊吹山を見て京へ帰ったのである。そして宣孝と結婚。しかし、宣孝は結婚後、まもなく病死。『尊卑分脈』には、長保三年（一〇〇一）四月二五日卒とある。長保二年に生まれたと思われる娘賢子けんしとともに式部は一時、途方に暮れるような状況にあつたらしい。幼い娘をかかえてどのように生活していたのか明らかでないが、まもなく父が時が四年の任期を終えて帰京する。そのころ父の励ましもあつてか、『源氏物語』の執筆が始まったのであらうと考える。

やがて式部は一条天皇の中宮藤原彰子しょうしのもとに出仕するが、この宮仕えは為時と中宮の父

道長の間で話が進み、実現したのであろう。宮仕え生活に対しての式部の気持はよろこびと、また一方、寂しい気分もあり、複雑であった。『紫式部日記』によって、宮仕え当時の式部の考えがしみじみとよく分かるのである。初出仕の日が二月二十九日であったことが寛弘五年（一〇〇八）の日記の次の記述にみられる。

師走しはすの二十九日に参る。はじめて参りしもこよひのことぞかし。

ここから、式部が中宮彰子に仕え始めたのは寛弘二―四年の師走であつたらうといわれている。しかし、これも推定であつて、もう少し前とも考えられよう。また、宮仕えに入つたとき、『源氏物語』はどの辺りまでできていたか。寛弘五年一月一日に行われた敦成親王あつひろの五十日いのお祝いのときに、藤原公任が式部に言つた言葉、

このわたりわりに若紫やさぶらふ。

が日記に記されていることにより、この時点で若紫巻まで書かれていたことは確實であり、もう少し先の巻まで書かれていたともいわれている。『源氏物語』は、為時が帰京して、父の勧めによって書き始め、宮仕えに出てからも書き続けられたのであろう。寛弘五年から約五〇年後に書かれた『更級日記』の著者が、『源氏物語』五四帖と記している。何年ぐらいかかつて式部が『源氏物語』を書き上げたかは不明であるが、それほど長い歳月をかけて作

られたものではなからう。

このように、式部が宮仕えに出たころには、『源氏物語』のある部分はすでに執筆されていたと考えられる。最初は慣れない宮仕え生活に苦悩があった式部も、慣れてくると喜びも見いだし、中宮彰子に対する尊敬と愛情も深くなり、道長も『源氏物語』の著者である紫式部をかなり重視するようになったのであろう。さらに道長は彰子の家庭教師のような役目を式部に求めるようになる。と同時に、道長は式部にも勉強を続けることを望み、『源氏物語』の完成を背後から大いに応援するようになっていったのであろう。式部は、宮仕え生活を樂しみつつ『源氏物語』の執筆を続けることができたと思われる。

こうして、式部は、宮仕えのなかで経験したことをいろいろと取り合わせ、一方では、延喜・天曆てんりやくのころのことなど文献で調べたことはもちろん、また、人々から聞いたことなどを材料として、たくさんしゅうしゅうの資料蒐集の下に物語を書いていったのである。道長がいればこそあの大部な物語が完成したのであり、式部自身も『源氏物語』を書くことに何よりの喜びを感じていた。物語を書くことによっていろいろの悩みも忘れられる、自分は書くことがあるから救われるという気持ちで書き続けていったのである。

賜姓源氏と藤原氏——源融の人格——

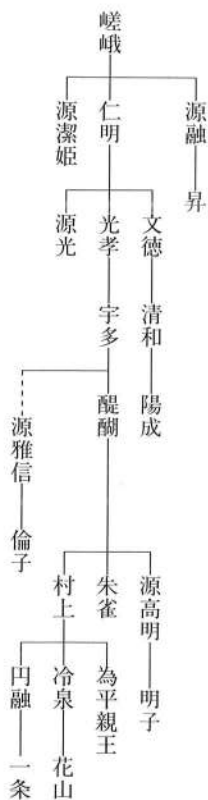
『源氏物語』は、いうまでもなく源氏の貴公子をモデルとした創作物語である。その歴史上の人物としては、源高明たかあきら、源融ととおる、源光等ひかる々々がいる。なかでも須磨・明石の巻は、高明が安和の変で大宰府（太宰府）に配流となる安和二年（九六九）の史実を准拠としている。その他、菅原道真など多くの歴史上の人物をモデルにしつつ、光源氏の人間像をかたちづくっている。

過去の歴史のなかで、式部が特に参考にした時代は、藤原氏と源氏の合同政治ともいうべきものを、源高明と藤原師輔もろすけが、村上天皇と中宮安子あんしの御心を察して考慮していたときだといえよう。天皇親政で文化の栄えた時代——延喜・天曆の聖代せいだい——を式部は憶っていたのである。と同時に、道長を中心とする当代の外戚政治の実態もよく理解し、その当時のあり方を光源氏という人物に託し、写実小説として、儀式の実態なども織り込みつつ物語を展開していった。とりわけ、現実生活のなかで言動を見聞きし、尊敬の念の深い藤原道長も准拠・モデルとし、光源氏の全盛時代を自身の経験とともに書き綴っていったことはいうまでもないのであるが、ここでは歴史上の源氏の貴公子たちに注目して論じていきたい。まずは弘仁

一三年（八二二）生まれの嵯峨源氏、源融である。

賜姓源氏は嵯峨天皇の時代に始まる。皇室経済の節約とでもいおうか、皇族に源朝臣あそんの姓

◎天皇・親王・源氏系図



◎藤原氏系図

